
フェアリー・チルド

鈴寝間着

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フュアリー・チルド

【ZINE】

Z0091Z

【作者名】

鈴寝間着

【あらすじ】

元人気映画の子役として出演していた俺、滝川 海斗は友達の少女を撮影中の事故で無くしてしまった。それを境に少年は『勇者君』と蔑まれ、苛められるようになってしまった。

そんな俺のいるクラスに転校生がやってきたんだ。

そいつの名前は『紺野 紫水』、真っ白な髪を揺らしながら俺なんて言つたと思う？

「あなたのための世界があるの」

ふざけるなと思ったら、だが彼女との出会いが俺を次第に変化させ

ていぐ。

すこし病んでファンタジーラブコメディー
どうぞよろしく

第1章 STEP ON(前書き)

ふうん、楽しんでいつてください m(ーー)m
初心者ですのでお手柔らかに

幼い時の事を覚えている人は少ないかもしれない。

例えそれが辛く、苦い思い出でも・・・また幸せな出来事でも年がたつにつれて人は次第に忘れてしまうものなのだろう。

でも僕は覚えている。

あの崖から突き落とされるような思い出を、たった一人で耐えた日々を・・・。

町を歩くだけで「あの子って・・・」と言われ、小学校では顔も知らない人に虐められさえした。

それでも耐えて見せた。鉄の仮面をかぶり、唯一の安全地であるはずの家でも自分を閉ざし続けた。

その苦しみの始まりは小学5年生の夏だった・・・。

僕は商店街を歩いていたんだ。もちろん一人じゃなかつた。

隣にはもう名前も覚えていないけど女の子がいたはずだ・・・。人ごみにもまれ、なんとか端によつて一息ついて僕は少女にこう話しかけたんだ。

「今日つてほんとについてないな。そこら中でセールをやってるから人が多いや」

しつかり握った手にギュッと力を込める、少女に笑いかけた。

「うん、だね。夏場の暑さに加えてこれだけ人が集まると嫌になっちゃうね」

苦笑といった感じで少女も僕に微笑み返してくれる。

人ごみのせいで熱くなつた空気は渦巻き、僕たちの額からたらたらと汗が流れた。

「君たち・・・少しいいかな?」

髪を短く切りそろえたいかにも中年な男が突然僕たちに声をかけてきたんだ。

本当に見えているのかと思うほど細い目は僕たちに向けら、見られているこいつ側とすれば少し気味が悪かつた。

「「じめんね、怖がらせちゃったかな？おじさん怪しい人じゃないから」

明らかにその発言が怪しい。。

思わず一步引く僕たちに困ったように頭を搔くと、スッと内ポケットに手を突っ込むと名刺らしきものを一枚取り出して僕たちに渡してきた。

「おじさん」「いつねつ者なんだけど、しらないかな」

○○映画スカウトスタッフ

前田 菱機

「おじさんね、映画のスカウトをやつてるんだけど、君たち映画に出てみないかな？」

それはCMでも宣伝されているほど有名な映画で、突然役者の男の子と女の子、の役が一人死んでしまったので募集していると有名な映画だった。

ファンタジー物の映画で小学生、中学生まで今はやりにもなつているほどの超大作だった。

普通オーディションなどで選ばれるものらしいが監督の意見で一般人からもスカウトしてくるみたいだ。

「おうちの人と相談して電話してね、名刺に電話番号書いてあるから

糸田の男はさつさと人ごみに交じると数秒もしないうちに消えてしまった。

もちろん僕たちの親は映画に出ることを賛成してくれた。

理由の一つは親が映画好きだった事と、その時は知らなかつたが子

供の将来を思うと役者で「デビュー」しておけば未来は幾分か安全だそうだ。

二人笑いながら映画で演技する日々・・・それは酷でもあつたし辛かつたけど何より隣にあの子がいたことで、前の日々よりもいつも楽しくなった、ただ砂が流れるように楽しい時間が過ぎていくのを見ていたんだ。

そのあとに何が来るのかも知らずに・・・。

第一章 Step on

「起きろよ、勇者君よおおおーー！」

横腹にいきなり激痛が走る。

「寝てねえで、さつさとパンかつてここいやー！」

次は逆の横腹を殴られた。

ああ・・・最悪だ。せつかく幸せな夢だったのにぶち壊しやがって。

「・・・・・」

今まで寝ていた机から顔をあげて立ち上ると左右に居る男子を見る。

そりこみを入れた坊主と髪を赤く染めたロン毛・・・またこいつ等か。

見られていることに気づいた赤パツは俺に蹴りを入れてくる。

「あああー？何睨んでんだよ？俺の言つことが聞けねえのかよ、勇者君よおー」

脛をけられてようめく俺に手を伸ばして胸倉をつかむとグッと持ち上げる。

赤パツより少し背の低い俺は軽々と持ち上がりると何も言わずにまた見つめ返す。

「金髪だからってなめてんじゃねえよー」

剃り込みがまた睨んでると思ったのか頬に一発貰う。

「あ・・・わかったよ。焼きそばパンだろ」

降ろせと胸倉をつかんでいた手を叩くと地に足をつけてゆがんだネクタイを直す。

そんな冷静な俺にイライラ来ていたのか、みぞりけに一発入れてドアの方に剃り込みを連れて出ていく。

「5分後に屋上で待ってるからな、遅れたら半殺しな」

「勇者ならこれぐら出来るよな」

息も絶え絶えに跪く俺の背中に声をかけて廊下を馬鹿笑いしながら遠ざかっていくのがわかる。

その声が完全に聞こえなくなると今まで嘘のように静まり返つていた教室がにぎやかなものへと変わつていく。

「大丈夫？」

「暴力振るう男子つて最低だよね」

「代わりに買って持つて来ようか？」

「ホントにムカつくよな・・・あいつ等」

跪く俺にクラスメイトが数人駆け寄つてきて声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。ありがとな自分で行くから大丈夫だつて」

口の中で鉄の味が広がるのを無視して購買へと歩き出す。

高校生になつても引きずられる過去・・・俺のあだ名は『勇者君』。あの映画に出て俺の人生は一変した。映画が続いている内はまだ良かつたんだ。

クラスの女子や男子からチヤホヤされ町を歩いても良い噂ばかり聞こえてくる。

もちろん、そんな俺に嫉妬を焼く奴もいたどうがそんな奴は気にならないほど楽しかった。

だが俺たちが出ていた映画は一年後に終わりを告げたんだ。俺の友達、いつも隣に居てくれた少女・・・その子が放送中の事故で無くなつたんだ。

俺の手の中で・・・ただ支える事しかできなかつた。

皮肉にも俺たちの出た映画はバットエンドだつた・・・。

最後は悪役が勝ち、悪役の都合のいい一種の平和な世界になる、そんな物語だつたんだ。

最後のシーンで少女の最後のシーンがあつたんだ、本当にこの世を離れ行く彼女のシーンが・・・。

その日を境に俺は蔑まれ、憎まれ罵られるようになつたんだ。

そうだろう？役立たずの勇者がヒロインの彼女も守り切れず、現実では彼女が本当に死んでいるんだ。

『お前が殺したんだろう？』

『なぜ助けなかつた』

そう聞かれても、分からぬ、知らないとしか答えようがなかつた。

そして憎まれた末に俺についたあだ名が『人間の恥』^{人間の恥}だったんだ。それが俺の悪夢の始まりだつたんだ。

第1章 STEP ON（後書き）

ちょっと投稿方法m_sしたかな^_^;
まだ初心者なのであとがきなんて（いえいえ）
では次の更新まで（さよなら）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0091z/>

フェアリー・チルド

2011年11月30日18時46分発行